



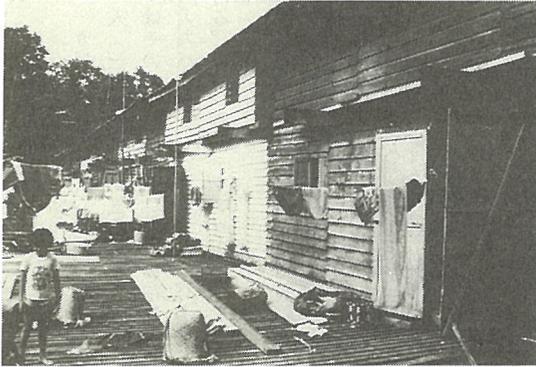
てのイバンロングハウスの訪問で、それぞれに歓迎されたが、昼間のことで仕事に出てい  
る人が多く、トアイ・ルマ（ロングハウス長、  
トアイは長、ルマはロングハウスの意）に会  
えたのはルマ・アジイだけだった。ルマ・ジ  
ヤコンは道路からだいぶ離れていて、歩いて  
到達するのが大変であった。三つのロングハ  
ウスとも規模が小さいと感じた。

翌二十七日、ムカ空港から小型機でシブへ。  
シブからカピットへの当日の空の便はなかつ  
たので、翌二十八日にカピットへ飛んだ。地  
区事務所長不在のため、事務所に三つのロ  
ングハウスを紹介してもらった。

カピットの町（人口三千五百）からバレー  
川中流への唯一の交通路は川である。翌朝の  
急行船で約三時間バレー川をさかのぼり、ナ  
ンガ（河口）カインで急行船から川に浮ぶ二  
本の丸太の上に降ろされた時は途方に暮れ  
た。不安定な丸太の上から、チュートン氏が  
大声で助けを求めたが、何の応答もなかった。  
しばらくして、二人の子供がロングボートで  
カイン川を下ってきたので呼び止め、向う岸  
のルマ・ブジャ（二十四ビレック）のところ  
まで送ってもらった。トアイ・ルマは不在で

あった。

その後、ロングボートでバレー川の少し上  
流のルマ・パンガウ（二十五ビレック）まで  
送ってもらい、トアイ・ルマとその家族の歓  
待を受けた。近いうちにまた訪問したい旨述  
べると、五月下旬にガワイ（祝祭）があるの  
で、その時来るようにと言われた。下り急行



ルマ・ジャマル外景

船の来る時間となったので、もう一つのロン  
グハウス訪問は取止め、二時間おくれてやっ  
てきた急行船で、夕方カピットの町に着いた。  
この予備調査の結果、カピット地区がずつ  
と伝統的なイバン文化を保持しているように  
思われた。さらに、ムカはロングハウスが小  
規模なものと、タクシーで一時間かかるが、カ  
ピットでは急行船が利用できるもので、カピッ  
トを調査地とすることに決定し、五月九日ク  
チンよりカピットへ移った。カピット地区は  
野党の優勢な地域であり、ルーカス館長もこ  
の点を心配されていたが、今ふり返ってみる  
と、予備調査の重要性を感じるとともに、こ  
の地域を選んだことは、本調査の結果から見  
てもよかつたと思う。

#### 独立二十五周年記念

一九八八年に在外研究の機会を与えられ、  
サラワクに行ったのは幸運であった。サラワ  
クがイギリス植民地より独立してから二十五  
周年を迎え、様々な記念行事が催されたから  
である。日本と異なり、サラワクは多民族か  
ら成る社会である。六月と七月に、サラワク  
を構成するイバン、マレー、ビダユ、メラ

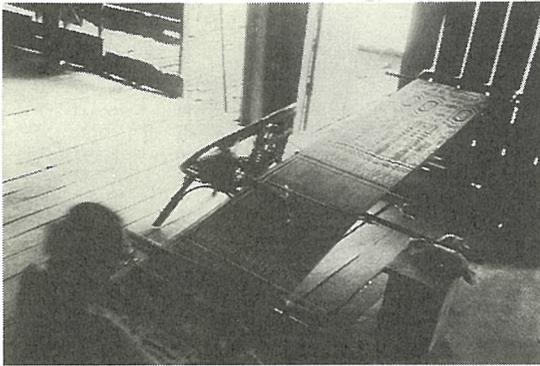
ノ、オラン・ウル、インド、中国の各民族文化に関する研究会が各地で催され、七月三十一日から八月四日まで、クチンでそれらをまとめるシンポジウムが開催された。それらの中で、私はカピットで催されたイバン研究会と、クチンのシンポジウムに出席した。

イバン研究会は六月二十七日より三十日まで、約四十人が参加して、メリガイホテルで開催された。イバンの伝統文化、イバン文化の歴史的側面、イバンの伝統社会、イバンとその象徴および今日のイバンについて、マレーシアは言うまでもなく、アメリカとオーストラリアの大学の専門家によつて報告が行われた。

クチンのホリデイ・インにおけるシンポジウムでは、州長官、副長官などの基調講演につづいて、各地で開催された研究会の報告がなされた後、多文化社会における民族性、芸術、物質文化、音楽、言語、慣習法、観光文化などの話題についての発表と討論が行われた。イバン研究会の発表者の外に、イギリス、アメリカ、オーストラリアからの学者による報告が行われた。これらの専門家に会えたのは、記念行事のおかげであった。

### ベングルー・ママト

カピット地区の人口は三万八千九百八十一人（一九八八年六月五日現在）で、イバン族はその八十九パーセントを占め、他には中国人九パーセント、マレー人二パーセントである。イバン族はテマンゴ、ペマンチャある

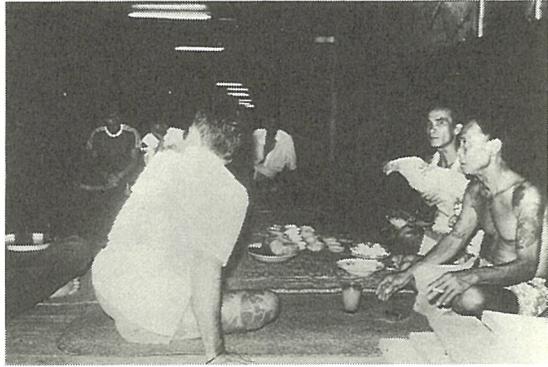


クンボを織るトアイ・ルマ・サイドの義母

いはベングルーと呼ばれる九人の現地人の指導者の下にある。ベングルー・ママトはバレー川中流の三十四のロングハウスを担当し、私が調査した三つのロングハウスは、いずれも彼の指導下にあった。

五月二十五日、私はバレー川支流のガット川の downstream にあるロングハウスに、ベングルー・ママトを訪問した。先の予備調査で訪れたルマ・パンガウが、私の調査目的に最適であるかどうかを確認するためであった。

次にベングルー・ママトを訪問したのは十一月二十八日で、結局第二のロングハウスとして滞在中のルマ・パンガウの調査終了後、第三のロングハウスを推薦してもらうためだった。十二月十七日、ママト氏の子息に、ナンガ・ガットよりガット川をロングポイントで一時間さかのぼったところにあるルマ・サイドに連れて行ってほしい、トアイ・ルマ・サイドの快諾を得て、最後のロングハウスが決つたのである。ベングルー・ママトが、そのすぐれたリーダーシップと暖かい人間性によって、私の調査の基本方針の決定に与えられた影響は大きい。



ピリン。ルマ・ジャマルにて

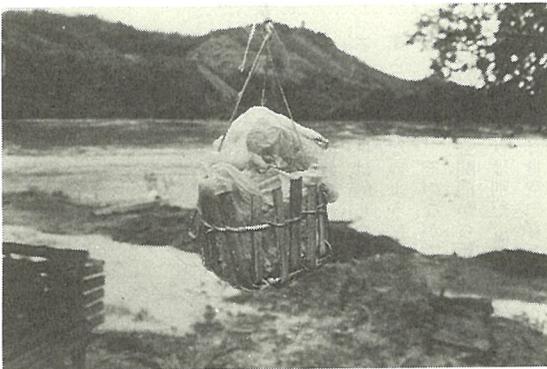
ガワイ

五月二十六日、私はママット氏によって、ナンガ・ガットの中国人酒保におけるガワイ・トア（幸運と富を祈る祝祭）に連れていかれた。その際、後程調査の最初のロングハウスとなったルマ・ジャマルのトアイ・ルマやその他の人人と出会っていたことが後日判

明した。

翌朝ルマ・パンガウから、トアイ・ルマの娘婿一人が迎えに来られ、ロングボートで約二十分パレー川を下ってルマ・パンガウに着いた。この日が、予備調査の時、トアイ・ルマ・パンガウから招待されたガワイ・ダヤクの当日であった。数多いガワイの中で、ガワイ・ダヤクはイバン族の新年の祝祭で、最も代表的なものである。仕事のためロングハウスを離れている人人も、このガワイには皆帰ってくる。他のロングハウスからの親族や客も多い。ルアイ（廊下、ロングハウス内の共通の場）の中央に建てられた、いくつかのクンボ（儀礼用の木綿の織物）で象徴される神の回りを、三人のレマンバン（吟唱詩人）が徹夜で祈願をして回る中を、人人は行列をなしてルアイの端から端まで歩き、各所でピリン（神に供物をする）が繰り返された。他方、盛装した男女がダンスを踊り、入賞者が表彰されるなどの余興が時折行われた。熱気のこもった祝祭は夜を徹して続けられた。

十二月二十八日、ルマ・ジャマルの近くのルマ・アンパウにおける、この地区で有名なガワイ・トアに、イバンの若い友人三人とと



魔除。大雨の後、パレー川増水の時。ルマ・ジャマルにて

もに参加した。レマンバンの祈願、盛装した男女の行列、着ているシャツに針を通す魔除、五頭の豚の犠牲と、取出された肝臓の供物、ダンスなどの多彩な行事によって、アング・マラ神が招かれ、幸運と富が祈願された。これらのガワイを通して、私はイバン族の真の歓待に接したと思う。多量のトアク（米

から造るイバン族の地酒)を飲み、ごち走を食べながら、夜を徹して歓談する。イバン族の暖かい気持が、この時程はつきりと感じられる時はない。

### 本調査

現在サラワクでは、観光客は歓迎されるが、



食事風景。ルマ・ジャマルにて

長期の調査に従事することは極めて困難である。今日までに調査許可を得た者は日本人ではわずか三人であり、私の場合も、最終的な州政府の許可があったのは、一九八八年六月二十四日であった。

カピットの町と、調査地近くのバレー中学において、イバン語の学習をした後、九月五日から本年二月二十七日まで、時時カピットの町へ帰った以外は、前述の三つのロングハウスのトアイ・ルマ宅に、通訳とともに滞在した。家族と親族についての調査は、主として面接によって行つた。

イバン族の家族と親族に関する代表的な研究は、オーストラリア国立大学名誉教授デレック・フリーマンのそれである。フリーマンは、男女が結婚する場合、夫妻だけの新居を構えることはないことが、イバン社会の最も重要な特質であると論じているが、私の調査したところでは、いずも同じく、多数の夫婦が結婚時に核家族を形成していた。

本調査終了後、十カ月にわたるカピット滞在を終え、サラワクにおけるイバン文化の全体像を得るため、通いなれたカピット波止場

を後にして、急行船でシブに向かったのは、三月六日のことであつた。(大学神学部教授)

### 表紙のことば

田辺校地の建物は直線で構成されているので、私には敵しすぎる。心の休まる柔らかさがないように思う。寛いだ気持ちになれない。そのなかで大学のラーネット図書館の玄関前から新島記念講堂を望んだときだけは別だ。僅かにほつとする。それも澄んだ青空のもとでも、少し曇り日のときに眺める講堂のほうが、建物の輪廓が空に馴染んでいて、私には気持ちがいい。落着いた感じになる。そこで私は深呼吸をする。

玉井 敬之

(大学文学部教授)